

埋文

とやま

Toyama Prefectural Center for Archaeological Operations

2008.3.25

VOL

102



台付浅鉢形土器。重文指定の浅鉢で台が付くのはこれが唯一。大きく広がった口縁部を、渦巻文を施した隆帯が引き締める。この品格は、古代オリンピックで使われた聖火台のよう。

朝日町境A遺跡出土

重要文化財

連載企画 ● とやま発掘物語—石名田木舟遺跡—

とっておき埋文講座 ● 古墳出現期の墓と集落

私のおすすめ ● 大型打製石斧

Center Flash ● 催しガイド 2008

行ってこられよ ● 高岡市立博物館

富山県埋蔵文化財センター

いしなだきふね

石名田木舟遺跡

—天正地震で破壊された木舟城下町—

天正地震の発生

富山県西部、平坦な水田に浮かぶ木舟城。その城から北方約400mに、城下町と言われている15世紀後半から16世紀末の高岡市石名田木舟遺跡があります。能越自動車道建設に先立ち、富山県文化振興財団が平成5年から3箇年かけて発掘調査を行いました(『石名田木舟発掘調査報告』2002)。



ところで、木舟城は、寿永3年(1184)、石黒太郎光弘の築城伝承がありますが、近年の研究から、南北朝以前に、南砺市の福光城に拠点を持っていた石黒氏の庶流が、木舟に進出してきたと指摘されています。石黒氏が木舟城主を代々つとめていましたが、天正9年(1581)に石黒成綱が、織田信長によって滋賀県長浜城で討ち取られて、木舟城は織田方に落ちました。佐々成政、さらに前田利家の支配となり、天正13年(1585)、前田秀継が今石動城から木舟城に入城してきました。同年11月の天正地震に

より城が崩れ秀継らが圧死したため、翌年、秀継の子前田利秀が、今石動に城を移転し、木舟城は廃城となりました。

この天正13年の地震は、中部地域中西部から近畿地域東部に大きな被害を与えています。石名田木舟遺跡の発掘調査からも、地面の下から砂が吹き上がる液状化現象が確認でき、震度6以上の揺れがあったことが明らかになりました。城や城下町が大きな被害を被ったことが想像されます。



地震による填砂で裂かれた井戸

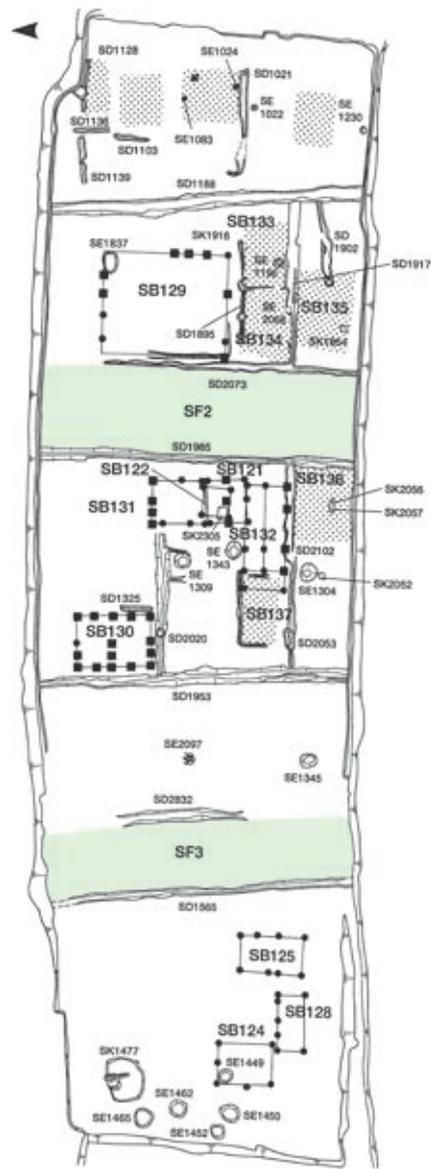
姿をあらわした城下町

どんな城下町が確認されたのでしょうか。石名田木舟遺跡B2地区の中世上面(16世紀後半から末の最盛期)には、幅15mの道路(SF2)と幅12mの道路(SF3)に挟まれた区画(幅40m)から建物、井戸などが検出されました。これらの道路に挟まれて短冊型の小区画に建物も並んでいます。SF2に面した大きな礎石建物(SB129)では、周辺から龍を形取った銅製品や葉茶壺が出土しました。また、隣接した土台建物から炭化米が見つかり、この礎石建物は、家臣などの有力者の屋敷地ではないかと推測されています。

また、石名田木舟遺跡の東方約500mにある開ぼつ大滝遺跡(16世紀後半から末)では、南北に連なる2条

の道路に沿って建物が配置された町並みが現れました。短冊型の区画地に梁行1間の小型建物が54棟確認でき、鍛冶に関する炉が60基以上検出され、鍛冶関係の職人町ではないかと考えられています。

以上から、木舟城の城下町は、城を中心として道沿いに町並みが放射状に広がっています。



B2地区の中世上面遺構図

城下町の生活

次に、城下町の人々の暮らしぶりを出土遺物から見てみましょう。

日常容器には、各地で生産された焼物が使われていました。城下町の近隣で焼かれたと推測される土師器皿(カワラケ)、石川県の珠洲焼、福井県の越前焼、愛知県・岐阜県の瀬戸美濃焼など国内の焼物が流通していました。また、中国からの青磁・白磁・染付があり、このように国内外の焼物が、交易によって日本海航路で県内に運ばれてきています。



天目茶碗・茶入れ・葉茶壺

食生活では、マダイ・タラ・カレイ・ヒラメ・フグ・アジ・イワシ・サバ・カツオ・サケなどの海産魚類の種類が、比較的豊富で、かなりの量を食べていたこともわかりました。海産魚類の多さに比べ、海産貝類はアカニシなどわずしか確認できません。栽培植物では、ウメ・モモ・ナシ・イネ・ヒエ・オオムギ・コムギ・アサ・ソバ・マメ類・エゴマ・ナス・トウガン・ヒョウタン類・メロン類などの種実を検出しました。多種類の栽培植物は、当時の豊かな食生活の一端を表しています。食物の煮炊きには、鉄鍋を使い、鍋をイロリに吊り下げる自在鍵も出土しています。

当時の衣服は出土していませんが、一木作りの下駄・差齒下駄・雪下駄・草履下駄など多様な履物がありました。季節・用途に応じて履き分けていたことがわかります。

遊びの道具としては、子供の遊びとしての独楽、大人の遊びとしての将棋・碁石などがあり、当時の遊びの様子が伺えます。

生活や自然環境などから来る不安に対して、さまざまな祭祀や呪術が行

われ、それらに使われていた呪符が出土しています。「五大力菩薩」を書かれた盗難除け木札、修験道の魔よけ木札、「急急如律令」を墨書された悪霊や怨霊を祓うための木札、陰陽道の呪術を示す墨書土師器皿があります。これらの木札や土器に文字を書くための硯や墨も出土しています。

戦いの道具

城下町から出土した武具と武器を取り上げます。

まず、兜の鉢があげられます。この鉢は、ヘルメットのような形をしており、その頂部には鋳留めの星を縦列状に並べています。当時は、鋳をたたきつづけて平らにし、鉄板をめだたせた筋兜が流行ったのですが、漆の分析から、この鉢は、鉄板でなく牛の生革を膠水にかわすいに浸けて打ち固めた練革ねりかわを用いた練鉢の可能性ができました。しかも黒漆の下目に見えない部分に金を用いる塗り方法は、非常に特殊な例です。このような出土例は、北陸では確認されていません。なお、練革兜の現存品としては、奈良県石上神宮所蔵の練革星鉢兜がよく知られています。



復元された兜

鎧は、黒色漆を塗った板状の小札つばだけで、全容は不明です。また、刀の鐔つばと切羽、弓矢の鉄鏃せつぱが出土していますが、当時は火縄銃を使っていました。火縄銃の引き金の火鋏や鉛玉、さらに、鉛玉を作る延べ板もあり、戦いに備えて城下で鉛玉を作っていました。

もう一つの木舟城

ところで、城下町のB2地区は、16世紀中頃から末までが中心です。このB2地区の西南方約500mにあるF地区は、15世紀後半から16世紀初めが中心です。F地区の溝で囲まれた方形区画域は、一辺が70mから80mの居館で、溝から大量の京都系土師器皿が出土しています。この皿は、武家を頂点とする酒宴の土器儀礼に組み込まれていたことを示しています。この区画溝から「宮之殿」銘の墨書付札も出土しており、また、この周辺の小字は「古屋敷」と呼ばれていることから、木舟城主の前身施設あるいは石黒氏の有力家臣のそれと推測されます。16世紀中頃から木舟城の拠点ついでを東に移し木舟城を再編し整備を行ったと推測されます。

憶測を加えれば、F地区の区画溝から出土した呪符に書かれた長享2年(1488)は、城主石黒光任が65歳で死去した年であり、何らかの因縁を感じます。また、鰐口に彫られた天正11年(1583)4月28日は、秀吉が佐々成政に木舟城を含め越中支配を任せたと記した文書と同一日であり、それとの因果関係があったのかもしれませんが、はかない夢が拡がります。

(宮田 進一)



F地区の区画溝出土の京都系土師器皿

古墳出現期の墓と集落

とっておき埋文講座

発掘調査報告会

高岡市下佐野遺跡



方形周溝墓

所在地 富山県高岡市佐野

調査年 2007年

調査主体 富山県埋蔵文化財センター

概要

下佐野遺跡は、高岡市の中央やや東の佐野・下佐野・西佐野地内に所在する。遺跡は、庄川扇状地北側の標高11m前後の佐野台地とよばれる微高地上に立地している。

周辺域は、昔から生活に適した地域であったようで、これまでに縄文時代から近世にいたるまでの多くの遺跡が発見されており、北西1kmには石塚遺跡がある。

古墳出現期の遺構は、墓域と住居域に区分される。墓域は、調査区のほぼ全域に広がっており、墓は方形周溝墓15基と前方後方形周溝墓2基、土坑墓5基、土器棺墓1基が確認できた。そのほか、方墳の可能性のある方形周溝が1基ある。方形周溝墓は弥生時代後期から弥生時代終末期にかけてのもので、主に調査区の南側で見つかった。また、前方後方形周溝墓は形態より弥生終末期から古墳時代前期にかけてのものと考えられ、調査区の北側から見つかっている。したがって、墓域は南側から北側へ移動していったと推測される。

住居域は、竪穴住居1棟、井戸2基、土坑6基で構成され、調査区の北側に広がっている。竪穴住居は火災に遭っており、木材が炭化して残っていた。そのほか、炭化した米などの穀類が詰まった甕が出土している。竪穴住居からは緑色凝灰岩の管玉未成品や破片が見つかり、玉作を行っていたと思われる。土坑には貯蔵穴と考えられるものもあった。(富山県埋蔵文化財センター 岡本淳一郎)



高岡市石塚遺跡



石塚2号墳(東から)

(高岡市教育委員会提供)

所在地 富山県高岡市石塚

調査年 1986・87・97・2003年

調査主体 高岡市教育委員会

概要

石塚遺跡は、高岡駅の南西約3kmにあり、祖父川と千保川(旧庄川)とに挟まれた佐野台地上に立地する。標高は約11~12mを測る。

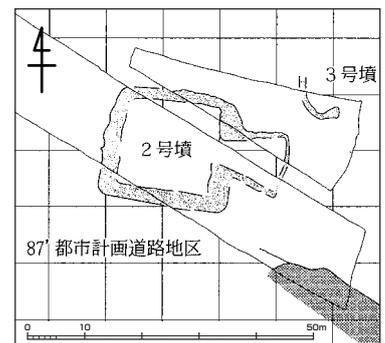
佐野台地は氷河期の庄川扇状地の末端部にあたり、縄文時代後晩期から人々の定住が確認され、周辺には下老子笹川遺跡や下佐野遺跡等がある。

石塚遺跡も、縄文時代後晩期から人々の生活が確認され、弥生時代中期の遺跡としては県内を代表する集落遺跡である。弥生時代中期の主な遺構として住居址3棟、方形周溝墓10基等がある。

弥生時代後期から終末期は、遺構・遺物がほとんど見られず、古墳時代初頭になると石塚古墳群が構築される。

古墳時代初頭の遺構は、石塚2号墳が全長29mの前方後方墳である。2号墳以外は部分的な調査であるため、全容は不明であるが、前方後方墳もしくは方墳とみられるものが5基認められる。

石塚遺跡では当該期の住居址が確認されていないため、石塚古墳群に埋葬された人々の住居域は、石塚古墳群周辺を含め周辺の下佐野遺跡や石名瀬A遺跡等の可能性がある。(高岡市教育委員会 山口辰一)



この報告会は、2月24日(日)に富山県立図書館多目的ホールにおいて当センターが開催した。

古墳出現期というのは、古墳とよばれる巨大な墓が作られ始めた弥生時代終末期～古墳時代初め(2世紀後半～3世紀中ごろ)の時期である。『魏志』倭人伝によると、2世紀後半に倭国内で戦乱があったが、3世紀に入って、卑弥呼が女王となって乱が終わったという。当時のふるさと富山は、どんな様子だったのだろうか。

暮らしては、炭化米の出土や遺跡が扇状地湧水帯や丘陵裾部に立地することから、豊かな水源を利用した稲作が生活の中心であったこと

がわかる。下佐野遺跡では、弥生時代終末期は、家族墓とみられる方形周溝墓が作られている。全長29mの石塚2号墳は、古墳時代初期に大きな墓へと変化することを示す。両遺跡の墓の形は、前方後方形や方形があるが、百塚住吉遺跡では、前方後円形の墓もある。墓の形の違いは、当時の人々がさかんに移動・交流していたことが背景にあるようだ。墓の大きさは、外からきた人に村の勢力を誇示しているらしい。移動・交流の理由はなんだろう。西の戦乱が及んだのか、東へと移住する人があったのか、鉄や玉の交易のためか。百塚遺跡の鉄鏃や新堀西遺跡の環濠は、その謎をとく鍵となるのかもしれない。

富山市百塚遺跡・百塚住吉遺跡



百塚遺跡・百塚住吉遺跡の航空写真(富山市教育委員会提供)

所在地 富山県富山市松木・宮尾

調査年 百塚遺跡(2007年)、百塚住吉遺跡(2005・2006年)

調査主体 富山市教育委員会

概要

百塚遺跡・百塚住吉遺跡は、富山湾から約4km内陸に入った神通川下流左岸の河岸段丘上(標高約10m)に立地する。百塚遺跡では、古墳時代前期初め頃の高墳6基が検出された。墳丘盛土や埋葬施設はすでに削平されており、周溝のみが確認された。

方墳SZ03は、一辺約14mの大型方墳であり、その周溝からは埋葬儀礼に使われた赤彩土器を含む土器群が墳丘上から転落した状態で出土した。土器の形から、隣接する百塚住吉遺跡の前方後方墳SZ02とほぼ同時期の古墳時代前期初め頃の高墳と考えられる。前方後方墳SZ05では、周溝内から当時の最先端技術で作られた武器(鉄鏃)が出土した。鉄鏃は、棺のなかに副葬されることが一般的なので、本例は埋葬施設が後世に削平された際に紛れ込んだものと考えられる。方墳SZ04は一辺約9mで、南辺の中央に陸橋部をもつ。

百塚遺跡の北側には、竪穴建物、前方後円墳、前方後方墳が発見された百塚住吉遺跡が隣接する。両遺跡の調査結果から、当地では弥生時代後期に人々が居住し始め、古墳出現期には、前方後円墳、前方後方墳、方墳といった様々な形の古墳が造られたことがわかる。

呉羽山丘陵南部や羽根丘陵には、杉谷4号墳や六治古塚などの四隅突出型墳丘墓のほか、勅使塚古墳や王塚古墳といった全長60mを超える大型前方後方墳があり、有力集団が存在したことがわかる。

百塚遺跡・百塚住吉遺跡で確認された古墳群は、呉羽山丘陵北部にも有力集団が存在したことを物語っている。(富山市教育委員会埋蔵文化財センター 小黒智久)



富山市新堀西遺跡



住居と環濠 (埋蔵文化財調査事務所提供)

所在地 富山県富山市水橋新堀

調査年 2007年

調査主体 富山県文化振興財団 埋蔵文化財調査事務所

概要

新堀西遺跡は、白岩川下流左岸の沖積低地に位置する。西側は約1.5kmほどで常願寺川右岸の堰堤に至る。付近での弥生時代の集落としては右岸に金尾遺跡、清水堂遺跡が知られているが、左岸で弥生時代の明瞭な集落遺跡が確認されたのは初めてのことである。

今回の調査では、東側を旧河道で、西側を二重の溝で囲む弥生時代の環濠集落の一部を検出した。検出した環濠の規模は内径が最大60m、外径が最大で80m前後を数える。西側の二重の溝は、円弧を描いて並走している。これらの溝はともに幅2.5m、深さ1m程度の規模で、横断面は緩やか「V」字状を呈している。

一方東側の旧河道は、最大幅10mを超え、深さ1.5m程度である。環濠の内側では、竪穴住居、布堀り建物、土坑、溝などを多数出土した。また、旧河道側では円形周溝状遺構や多数の土坑が検出した。土坑は円形を呈し内部から土器が出土するものが多い。その他、旧河道内には、方形木柵施設が検出されており、集水施設的な機能が想定される。

この集落は、弥生時代後期から古墳時代初頭(布留式並行期)まで存続したものと考えられる。富山県の当該期の拠点集落として貴重な調査事例である。(富山県文化振興財団 埋蔵文化財調査事務所 森 隆)



大型打製石斧

遺跡の概要

今回紹介する大型打製石斧は立山町二ツ塚遺跡からの出土品です。

遺跡は常願寺川の扇状地の扇端部で、標高は21~25mにある。

発掘調査はほ場整備事業に先立ち昭和51・52年に実施した。調査では縄文時代早期から晩期、弥生時代、古墳時代の遺物が出土し、特に縄文時代中期中葉から後期前葉の遺物が大量に出土した。また遺構では、縄文中期中葉から後葉の竪穴住居跡が40棟検出された。

出土遺物について

遺物の中では縄文土器に次いで磨製石斧と打製石斧が多数出土している。硬質砂岩系の磨製石斧は、1原石の荒割り→2側縁及び背面から打撃を加えて成形→3敲打で成形→4最終段階で研磨と製作過程を示すものが多くあり、当遺跡で石器の製作を行っていたと考えられる。打製石斧は砂岩・安山岩・凝灰岩等の石材が多く、形態は短冊形、撥形、分銅形に分類でき、磨製石斧と同様に本遺跡で製作していたものと考えられる。

大型打製石斧の概要

打製石斧は第1・2地区から大量に出土しており、第3・4地区からの出土は少なく、出土量に大きな差が見られた。

大型打製石斧は第1地区のX30Y23区より出土した。形態は短冊形で全長575mm×全幅210mm×最大厚66mmで重さが約8,200gあり、多分富山県内最大の打製石斧と思われる。

石材は安山岩と思われる扁平な板状の材を用い、両側縁部と刃部に整形加工を加えている。刃部は中央部が突出した円刃と思われ、一部先端が残っているが半分以上欠損している。多分節理面で割れたものと思われ、完成品か未成品かは不明である。

写真左下の打製石斧は、石材と製作手法が全く同じもので、全長155mm×全幅70mm×最大厚17mmで重さが約300gあり、標準よりやや大きなもので、比較すればいかに大型打製石斧が大きい分かる。

大型打製石斧の時期

第1・2地区は中期後葉から後期前葉

の土器の出土量が多く、第3・4地区は中期中葉の土器が主に出土している。出土土器から推測すれば多分中期後葉のものと考えられる。

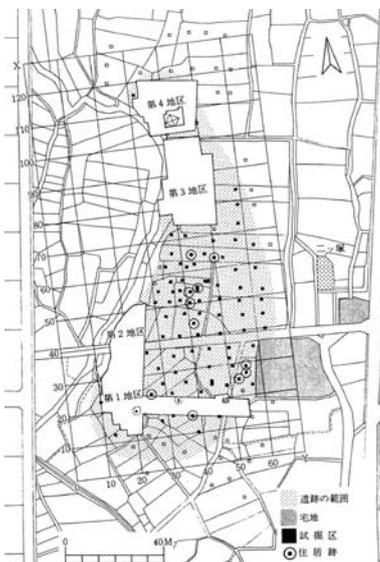
県内の類例

県内では射水市串田新遺跡から出土したと伝えられる大型打製石斧がある。形態は短冊形で全長460mm×全幅175mm×最大厚69mmで重さが約7,300gある。

大型打製石斧の用途

打製石斧は一般的に土掘り具として使用されていた。朝日町境A遺跡の打製石斧は428点出土しており、その中の比較的大きなものは、全長218mm×全幅80mm×最大厚25mmで重さ607gがあり、これが実用品として最大と思われる。

今回紹介した大型打製石斧の用途を考えると出土点数が少なく、またあまりにも巨大で実用品とは思えない。そのことより祭祀以外の用途はないと考えが、今後の資料の増加に待ちたい。(狩野 睦)



遺跡全体図



大型打製石斧 (左端は一般的な打製石斧)

企画展

「とやま発掘物語—その始まりの頃—(後期)」

後期展は、富山考古学の草分けといわれる早川莊作氏の蒐集品を中心に紹介します。また、郷土の歴史を学ぶ子どもたち向けに「富山のあけぼの」コーナーを設けます。

- 会 期 4月5日(土)～7月3日(木)
- 開館時間 9時～17時 入館無料
- 休 館 日 金曜日(祝日のときは、翌週最初の平日)



今年も魅力的な行事であなたを考古の世界に誘います!!

● 詳細はホームページや当センターまで

URL <http://www.pref.toyama.jp/branches/3041/3041.htm>

TEL 076-434-2814

■ 県民考古学講座・・・県民カレッジ連携講座です。

考古学の最新の成果と魅力をやさしくひもときます。今年も多彩な講師陣がみなさんをお迎えします。6月1日(日)より、年6回行います。詳細は、4月中旬からセンターの窓口やホームページでお知らせします。なお、この講座は県民カレッジ連携講座となっています。



■ 出前授業・・・小中学校での社会科や総合学習に。

県内どこの学校へも本物の出土品を持って出向きます。本物の石器や土器に実際に触れる時間を大切にしました授業を行います。授業の進度や状況など、ご要望に応じたさまざまな授業の展開が可能です。また、地域の出土品もお見せすることができます。



■ 考古学キッズ・・・小、中学生が対象です。

教科書の中の世界に飛び込んで、実際に古代の衣・食・住を体験してみませんか。古代の人々の目線でその頃の生活を見つめてみましょう。6月と7月の土曜日に計4回にわたって行います。対象は小学校4・5・6年生と中学生です。



■ ふるさと考古学講座・・・小学生親子、中学生が対象です。

親子で楽しく古代体験をしながら学べる考古学教室です。古代の知恵や技に感動できる体験です。夏休み中に10回、秋に3回行います。対象は小学校4・5・6年生とその保護者、中学生です。



詳しくは、各学校へ配布する案内をご覧ください▶

行ってこられよ —《32》

今度の休日、ちょっと出かけてみませんか。



高岡市立博物館

高岡市古城

来年は開町400年を迎える高岡市。合併した旧福岡町の情報も新たに加えられ、昨年7月に常設展示室がリニューアルしました。常設展「高岡ものがたり」では、桜谷古墳や越中国分寺の出土品などが展示され、高岡の産業や民俗などについても紹介されています。また、万葉の歌人大伴家持、高岡の開祖前田利長など、歴史上の著名な人物が次々と登場してきます。さらに「雑学クイズ」や「体験コーナー」などをおして楽しく学ぶことができます。

TEL：0766-20-1572

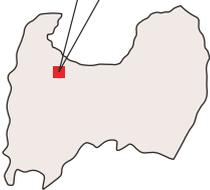
開館時間：9時～17時（入館は16時30分まで）

入館料：無料

休館日：月曜日（祝日のときは翌日）



- 当博物館がある高岡古城公園内には、動物園や射水神社もあります。
- 周辺の高岡大仏や土蔵造りの風情ある町並みが歴史の重みを伝えています。
- JR北陸本線高岡駅から車で3分、徒歩10分。



編集を終えて

呉羽丘陵一帯の草木が、芽吹きの時を静かに待っています。心躍る季節です。この躍動感を充実感に変えてみませんか。当センターがサポートします。どうぞ、お越し下さい。（長）

富山県埋蔵文化財センターニュース「埋文とやま」vol.102

平成20年3月25日発行 編集／富山県埋蔵文化財センター 〒930-0115 富山市茶屋町206-3 TEL 076-434-2814
URL <http://www.pref.toyama.jp/branches/3041/3041.htm>

